

平成25(2014)年度 研究拠点形成支援経費 難波・飛鳥・京都の歴史遺産の発掘と活用 成果報告集

著者	西本 昌弘, 積山 洋, 原田 正俊, 米田 文孝, 西光 慎治, 佐藤 健太郎, 藤井 陽輔, 三好 俊
ページ	1-83
発行年	2016-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/10259

近世大坂地図からみた古代の難波

西本昌弘

(1) 大坂分町地図

A区(天満周辺)

堀江(大川)に架かる天満橋・天神橋・難波橋の三橋を描く。堀江については、「堀江〈淀川ノ末流、是ヨリ大川〉」という説明を付す。

天神橋について、「渡邊橋^一大江橋」とも注記している点が注目される。古代・中世史料に「渡辺」と記された場所については、これまでは天満橋付近とする説が通説化していたが、近年では考古学的な発掘成果などから、天神橋付近とする説が有力となりつつある。天神橋を「渡邊橋」とも「大江橋」とも称したという記載は、こうした近年の有力説を補強する材料となるであろう。

B区(三津周辺)

現在の難波を中心とする地域である。

「三津村」があり、「三津寺」と「三津社」が描かれている。現在の三津寺大福院と御津八幡宮である。少なくとも慶長年間には、この場所に三津寺と三津社が存在したことを物語る資料といえる。

「三津村」より以西は「芦原」の広がる区画が五つに分けて描かれている。この場所は、明暦3年(1657)の大坂図ではその多くに町割りが施され、開発が進行中の場所であり、もっとも南の一角のみが「上難波津領」「下難波領」という広い空き地に表現されている。明暦3年図との比較からも、これら「芦原」の区画は古い様相をとどめたものとみることができよう。

C区(四天王寺周辺)

高津社から四天王寺までの範囲を描く。「谷町條」を南下した「安部野街道」が四天王寺の西門に接して走り、四天王寺の東門からは「大和河内路」が延びている。

(2) 大坂旧地図

A区(天満周辺)

淀川の末流に天満橋・「渡邊橋又大江橋」・難波橋の三橋が架かる様子を描く。前述した大坂分町地図では「天神橋」の名も掲げられていたが、この図では「天神橋」の名はみえず、「渡邊橋又大江橋」と記されている。「渡邊橋」「大江橋」の名称が古いものであることを示唆しよう。

「渡邊橋又大江橋」を南へ渡って少し行ったところ、「カウライハシ」(高麗橋)の東には、「窪津王子」が描かれている。現在は大阪府中央区石町の坐摩神社行宮に窪津王子跡がある。窪津王子は渡辺王子・大江王子とも称されたので、現在の天神橋の近辺にあたるこの辺りが窪津・渡辺・大江とも呼ばれた場所であることが想定できる。

B区(三津周辺)

「三津ノ社」が描かれるが、三津寺は描かれていない。現在の松屋町筋に沿って「坂口王子社」

と「高津社」が描かれている。「坂口王子社」は「アンドン寺ハシ」（安堂寺橋）の東にあたるが、同橋の西には「安曇大寺ノ跡」という注記が書かれている。

C区（四天王寺周辺）

四天王寺の境内が描かれる。西門に接して「安倍野街道」が走る。

（3）難波の三津寺について

『行基年譜』行年 77 歳条（天平 16 年条）には、

大福院 御津、二月八日起

尼院

已上、在摂国西城郡御津村

とあり、行基は摂津国西城郡（西成郡）御津村に大福院（御津院）と同尼院を造営した。その起工は天平 16 年（744）2 月 8 日のことであったという。御津村とは難波御津にちなむ地名であり、とりもなおさず、難波津における行基の活動を支える寺院として造営されたのが、御津院と御津尼院であった。

『古今和歌集』巻 18、973 番歌に、

我をきみなにはのうらにありしかば うきめをみつにあまとなりき

このうたは、ある人、むかしおとこありけるをうなの、おとことはずなりにければ、

なにはなるみつのてらにまかりて、あまになりてよみて男につかはせりけるとな

んいへる

とあり、夫からの音信が絶えたため、「なにはなるみつのてら」で出向いて尼になった女の歌が載せられている。難波の三津寺は平安時代にも庶民の寺として存続していたのである。

『江家次第』巻 12、斎王帰京次第によると、伊勢斎宮での任を終えて帰京する斎王は、7 日目に難波に入り、三津浜下方（住吉に擬す）・三津浜・安曇口の三処で禊を行った。この日、三津寺で諷誦が執り行われている。旧例では三日かけて三処禊を行ったが、近代は同日にこれを行うという。本来は 1 日目に住吉浜、2 日目に三津浜、3 日目に安曇口でそれぞれ禊を実施していたが、平安末期にはすべて 1 日の儀となり、住吉浜での禊は三津浜下方で代替されていたのである。

安祥寺所蔵の鐘銘に「摂州渡辺安曇寺洪鐘」とあるので、安曇とは渡辺付近の地名で、現在の天神橋付近に想定される。したがって、帰京にさいして難波に赴いた斎王は、住吉浜・三津浜および安曇（渡辺）の三処で禊を修したことになる。

三津寺（御津寺）は古代の難波津に設けられた代表的な寺院で、奈良時代以降、平安時代を通して貴族・庶民の信仰を集めた。この三津寺が少なくとも慶長年間以降、現在の難波・心齋橋地域に存続していたことは、古代難波津の位置を探る上で大きな手がかりを提供することになるだろう。